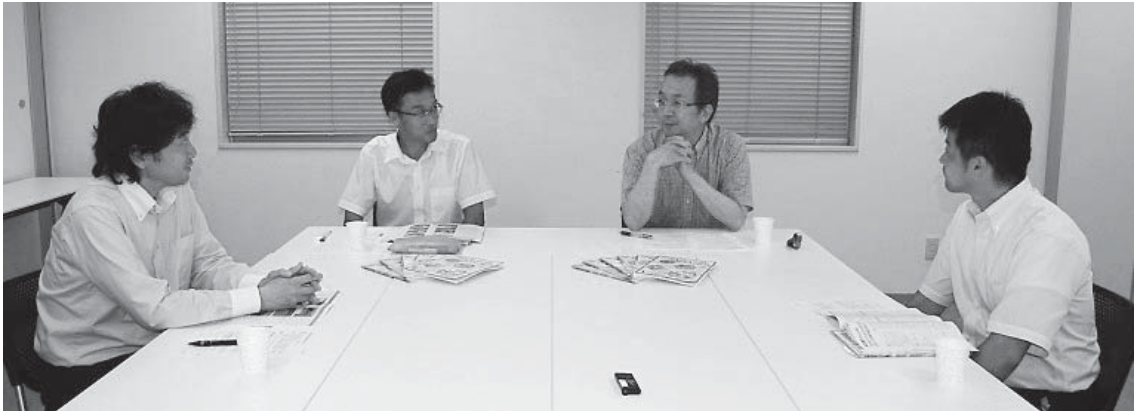


『体育の学習』を使った授業

座談会：副読本の力、『体育の学習』の力

～体育の授業で副読本を使うことの意義～



司会・東京学芸大学教授 **松田 恵示** 埼玉県飯能市立美杉台小学校教諭 **福島 真実**
東京学芸大学准教授 **鈴木 聡** 東京都世田谷区立松丘小学校教諭 **高木 孝輔**

■ぼくたちのゲームのことがかいてある

松田 本日はお忙しいところ、お集まりいただき、ありがとうございます。今日は体育科の学習指導において副読本を使うということがどのような意味をもつのか、副読本を使うことでどのように学習が広がるのか、ということについて具体的に考えていきたいと思っています。本日お越しいただきました先生方には、すでに『体育の学習』を使った授業の実践事例を『こどもと体育』にお書きいただいておりますので、まず、授業を実践いただいた当時の様子や現在の取り組みなどについてご紹介いただければと思います。

鈴木 今年の3月まで小学校の教員をしており、昨年度に指導していた1年生のボールゲームの単元で『体育の学習』を使った授業の実践事例を書かせていただきました（本誌156号掲載）。現在は、大学で教員志望の学生に向けて、体育の授業創りについて指導しています。そうした将来教員を目指す学生を指導をする際にも、『体育の学習』は子どもの目線に立って内容が構成されているので、授業のリアリティを学生に伝えることができるといよいよ評判を得ています。

福島 昨年度は6年生の担任をしていましたが、去年の6月に鉄棒運動の単元で『体育の学習』を使った授業の実践を行いました（本誌156号掲載）。その際に、これほど副読本を使って、子どもたちどうしが自ら教え合いをするのかということに驚くとともに、感動したことを覚えています。

高木 今年の6月に6年生の体ほぐしの運動の単元で授業実践を行いました（今号P.18-19掲載）。『体育の学習』には、いろいろな運動の例が写真やイラストでたくさん掲載されているので、子どもたちは動きをイメージしやすかったようです。また、教師が学習の進め方や運動の行い方などを説明しなくても、子どもたちがすぐに学習内容などを理解できるので、運動をする時間を長く確保することができました。

松田 まずは実践を振り返ってご紹介いただきましたが、『体育の学習』を使うことで子どもたちが学びを深めたり、授業についてのイメージもちやすくなったという感想が出てきました。それでは、授業の中で実際にどのように子どもたちが『体育の学習』を使っていたのか、具体的な様子や事例を教えてくださいませんか。

鈴木 1年生の「まとあてゲーム」の実践の中でゲームにだんだんと慣れてきて次の段階に移ろうとしたときに、子どもたちからゲームをよりおもしろく改善していこうとする意見がいろいろ出ました。しかし、そうした意見を聞いて具体的なイメージをもてる子どもとそうでない子どもとがいました。今までは、私が手描きのイラストなどを使って説明していましたが、それでもまだ抽象度が高く、学級全体に伝わっているかどうかについては不安がありました。しかしそこで『体育の学習』を使ってゲームの説明を行うと、子どもたちの発言していたようなことが具体的にイラスト化されているので、子どもたち全員に一度でゲームの具体的なイメージをもたせることができました。そのときにある子どもが、「ぼくたちのゲームのことがかいてある」と言ったのがおもしろかったですね。普通子どもたちは「教科書を学ぶ」というスタンスだと思いますが、教科書の具体的なイラストを手がかりとして自分たちのゲームを発展させていく姿から、「教科書で学ぶ」という授業が実現できたと思います。この実践授業のように、入学したばかりの1年生の子どもとでも、自分たちのやっていることを確認しながら、子どもとともに授業をつくっていくことができるという点で、役に立ちました。

松田 「ぼくたちのゲームのことがかいてある」というのはおもしろい表現ですね。

『体育の学習』を使うことで、自分の学習課題を見つかったり、子どもたちがお互いに確認し合ったりということもありましたか。

福島 鉄棒運動の実践の中では、新しい技の練習をする際に、子どもたちが『体育の学習』に掲載されている連続写真で技のポイントや流れなどを自分の実際の動きと見比べていました。そして各自が自分の動きの改善点を考えたり、他の子どもと技を教え合ったりしていました。

松田 自分たちが取り組んでいる学習課題に対してのポイントを、子どもたち1人ひとりが自ら考え、実践することができていたということです。

高木 動きのポイントになる吹き出しの言葉は教師から声かけをする際の手がかりになりますし、子どもどうしてもその文言を使って自然に声かけができていました。それにより、いろいろな運動

をすることや、運動を通して関わり合うことの気持ちよさについて、具体的な言葉によって実感できていました。

松田 子どもたちがねらいやめあてをもって意欲的に活動をするためには、副読本のような資料が必要不可欠なものとなるということでしょうか。もしそうだとしたら、副読本がなければ子どもたちのそうした活動は出にくいものなのでしょうか。

福島 例えば鉄棒運動などを教えていると、教師の言葉をもとにして徐々に子どもたちの教え合いが広がっていく感じがします。しかし、副読本を使うと、『体育の学習』に書いてある技のポイントの言葉を使って最初から教え合いができました。さらに、自分のつまずきを考えて、いくつか紹介されている練習のしかたの例を参考に、普段より意欲的に活動ができました。つまり、『体育の学習』を活用することで、活動がよりスムーズにできたと思います。また、児童が1人1冊『体育の学習』を持つことで、練習して、その後すぐに各自が自分の技の出来栄を確認できるのでよかったと思います。

松田 副読本は、子どもたち1人ひとりが自分のテンポやリズムで情報を得て学習を振り返ったり、得た情報をもとに学び合ったりするという、自分や友達の学習課題を評価できるツールであるということですね。一方で副読本以外に、自作のプリントや学習カードなどもあると思いますが、それらと副読本の違いというのはどういった点でしょうか。

鈴木 これまで使用していた学習カードは、自分のめあてや振り返りを記載したり、技のポイントを数点載せて、子どもたちが参考にしたりするものでした。それに対して副読本は、学習の道筋を確かめたり発展させたりするうえでのガイドラインとなっています。つまり、1つひとつのねらいを達成させる手立てとして学習カードは機能していましたが、副読本は、学びのストーリーを描いていくうえで活用できるところに独自性があると思います。

■子どもが自主的に単元の流れを見通せる

松田 ここまでのお話は授業1コマの中での子どもの学びが中心でしたが、数時間にわたる単元全体を通じての副読本の有効性を考えるとどん



なことがあるでしょうか。子どもたちが自分で学習を進めていったり練習方法を考えたり、単元全体の流れを子どもたちが自ら見通しを立てて学習に取り組めるということがあるのでしょうか。また、

授業の中で次に何をするのか、ということ副読本を読んでいる子どもたちが自然にイメージできるようになるというのは、先生方にとって指導をしていくうえで意味があるものなのでしょうか。福島 『体育の学習』にはどの単元にも“やってみる—ひろげる—ふかめる”という基本的な流れが書いてあり、それが子どもたちの頭の中に入っていましたので、その学習の流れに沿ってスムーズに授業を進められました。

高木 私の実践の場合は体ほぐしの運動なので、何らかの技能の習得などはありませんでしたが、運動内容を授業の最初に『体育の学習』で確認しました。そして実践に入ると、子どもたちから「こんなことをやってみよう」という声が出て自然と運動が広がっていきました。今回は、新しい運動に入るたびに本を開いて確認するという時間をとれなかったのですが、代わりに『体育の学習』に載っている写真を掲示資料として準備し、新しい運動を行う前に子どもたちを集めて見せました。それによって簡単に動きを確認することができました。また、授業の最後の振り返りを『体育の学習』を使いながら行くと、授業の流れに沿って振り返ることができると思います。

鈴木 授業や単元の先を見通すということについてですが、単元や授業が「次にどう進んでいくんだろう」ということについて、子どもたちが自主的に考えることができるようになったと思います。もちろん子どもたちが『体育の学習』をずっと読んでいたわけではないのですが、ほかの教科では子どもが授業に先んじて教科書を見るということはあまりないでしょうし、『体育の学習』がそうした姿勢を身につける契機になったようです。

■授業づくりや児童の評価にも使える

松田 改訂された新しい学習指導要領においては、課題解決学習として思考力、判断力、表現力など

が重視されています。そしてそれらすべてをふまえて、子どもたちが主体的に学んでいく姿勢というものが求められていますが、体育でそのような学習をするためには副読本のような教材は効果が高い、さらに言えば、なくてはならないものであるという感じですね。しかしその一方で、体育とは体を動かす学習であるから、体育の授業に教科書に準ずる本をもっていくことには抵抗感があるという方もいらっしゃるかもしれません。そもそも子どもたちには、体育の授業で本を使うということに抵抗感はないのでしょうか。

福島 私も実践授業をする際に初めて副読本を使ったので、正直、子どもたちが副読本を使うことに戸惑ったりして学習がスムーズに展開できないのではないか、と多少心配でした。しかし、子どもたちが副読本を使い、教え合っている風景を見て「使ってよかった」と思いました。子どもたちも、「動きがわかってよかった」などの感想を書いていたので、その場ですぐに『体育の学習』で技のポイントや練習のしかたを確認できるというのはよかったのだと思います（写真1）。

松田 体育の授業で『体育の学習』のような本はいらない、という考えは古い負の遺産なのではないか、ということですね。

今まで出てきた中で、子どもたちが自分の活動を見直したり、子どもどうして学んだりという活動がありましたが、『体育の学習』があると子どもたちもお互いを評価し合えるだけでなく、先生たちも体育の評価をしやすいということはありませんか。

高木 体育の授業の中で「思考・判断」という要素を具体的にどんなところで評価するのか、ということ非常に難しく感じていました。しかし『体育の学習』を使うと、掲載されている動きや



〔写真1〕技のポイントをすぐに確認できる。



ポイントに子どもたちが着目して、自分たちの動きの中に取り入れているのが見られました。そうした創意工夫をしている様子から「思考・判断」を評価することができました。

福島 器械運動の単位では、練習のしかたが載っているの、子どもたちがそれらに着目して各自が工夫して活動していました。そうした姿勢を評価することができました。

鈴木 「作戦をたててゲームをしよう」という課題に取り組んでいるときに、子どもたちは、『体育の学習』を参考にして作戦をたてようとしていました。また、『体育の学習』の内容を見ながら自分たちの活動を振り返ってもいたので、そうした活動を評価することができました（写真2）。

松田 評価の観点を先生方が子どもたちと一緒につくったり、共有したりできるということですね。ほかにこれまでお話したようなこと以外で「『体育の学習』をこんなふうに使ったら効果的だった」という新しい使い方やアイデアはありますか。

鈴木 授業の中ではないのですが、若い先生や体育の授業創りで悩んでいる先生と学年を組んだ際に、一緒に教材研究をするときにも『体育の学習』を使っています。先生方も紙面を見ながらだと実際の授業をイメージしやすく、若い先生方の授業の質の向上につながれると思います。つまり教員研修に使えると思うのです。そうして先生自ら『体育の学習』のよさを感じることができるので、子どもたちにも持たせたいですね。

松田 先生方の学習指導の力にも大きな影響を与えるということですね。

高木 同じく授業以外の場面ですが、子どもたちが1人1冊持っている、体育の授業以外でもすぐに手に取って見ることができるので、それが「こんな運動やってみたい」という意欲にもつながっていると思います。

松田 小学校の体育では、子どもたちが生涯にわたって運動に親しむための資質や能力、意欲を身につけることが重要になります。そのためには、さまざまな運動の特性や楽しさにふれたり、技能や知識を身につけたりすることが大切となり、それらを身につけるためには主体的な学習をしていかななくてははいけません。そうした「主体性」というものを身につけさせるためにも、副読本が子ど

もたちの手元に1人1冊行き届かなくてははいけないのではないか、と思います。

■子どもにとって

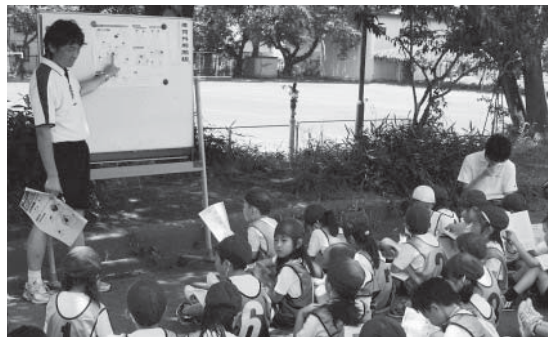
理想的な学習過程

松田 『体育の学習』の特長として“やってみる—ひろげる—ふかめる”という学習過程や、子どもたちの視点に立ち、子どもがやってみたいと思える内容を重視して取り上げていることなどがあげられますが、そうした『体育の学習』の特長については授業の中でどのように感じられましたか。

高木 紙面にない運動例をやったこともありましたが、子どもからは紙面に載っている運動のほうが好きでした。やはり子どもの興味・関心の点から、厳選されているのだろーと思います。

福島 器械運動では、“こんな運動してみよう”というコーナーが最初にあるので、まずはそれに組みこませることである程度の力を共通に身につけさせることができます。このコーナーは、技を身につけるのに必要な身体感覚を養うコーナーです。学年が上がっていくといろいろな能力が必要となるので、こうした身につけるべき要素がわかりやすく提示されているというのはいいですね。

鈴木 “やってみる—ひろげる—ふかめる”という流れ、学習の道筋は、子どもたちの運動への関わり方がだんだんと深まって無理なく運動に親しんでいける学習過程だと思います。教師の側からのトップダウンではない、子どもの目線に立った理想的な展開ではないでしょうか。私は年度の最初の方は『体育の学習』に示された流れの通りに使い、子どもたちに学習の進め方を体得させます。



〔写真2〕『体育の学習』を使って振り返る。



そして2学期からは単元の導入のページだけ使って、その先の展開については子どもたちに考えさせるということをしていました。すると、学習の流れが定着しているので、自ら次の学習の展開を考

えていくことができます。そうした「学習をどのように進めるか」ということを考えることは、主体的な学び手を育てるとともに、思考力を身につけることにつながると思います。これも、『体育の学習』を使って授業を創るよさの1つだと思います。

高木 学習過程の“やってみる—ひろげる—ふかめる”というのは子どもたちにとってとてもわかりやすい言葉ですね。どんな学習をしたらよいのか、わかりやすいと思います。私もこの展開に沿って授業を行いました。すると、子どもたちが自ら再度取り組みたい運動を見つけたり主体的に取り組んでいったりという姿勢を見て取ることができました（写真3）。

松田 先ほど課題解決学習という言葉を出しましたが、教師の側が課題を提示するのではなく、まずは子どもたちが課題を見つけなくては課題解決学習とはなりません。そのためには、子どもの気持ちが運動に向かう中で、まずは身につけている力で目いっぱい運動に取り組み、次に自らの力を高めていき、最後にあらためて身につけた力で運動に取り組む、という“やってみる—ひろげる—ふかめる”の流れは、子どもたちのその気持ちの変化に合ったものであり、子どもたちの興味・関心に合った課題解決学習にふさわしいものだと思います。



〔写真3〕再度取り組みたい運動をやってみる。

■体育における学習言語を身につける

松田 「めあて」など、授業の中でしか使わないいわゆる「学習言語」という言葉があります。そうした言葉は授業を秩序だてるうえで重要なものですが、ふだんは使わない言葉であるがゆえに、なじめない子どもたちもいます。副読本を使うことでそうした言葉にも自然になじめるようになるのではないのでしょうか。

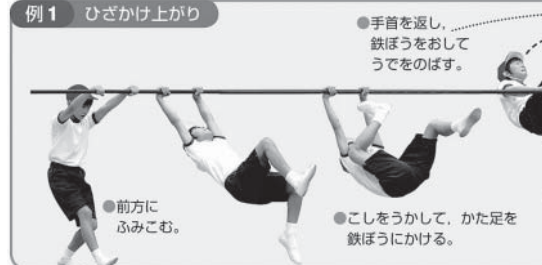
鈴木 「学習言語」として例にあがりました「めあて」というのは、非常に難しい言葉です。子どもによっては「めあて」とはどんなことなのか、そもそもどんなことを考えるべきなのか、といったこともわからない場合があります。体育というのは体を動かすのがメインの教科であるがゆえに、授業の中でそうした言語の定義の確認についてなどは、重点がおかれなことが多いようです。そのため用語の意味がわからない児童は授業においていかれてしまいます。しかし、そうした状況で副読本を使うと、副読本の中にあがっている内容を手がかりにして考えられるので、自ら「めあて」をもったり、課題を見つけたりすることができるようになります。また、競技のルールを確認する際にも、ルールに関わる言葉が文章化されているので共通理解しやすいですし、一般的なルールと授業内でのルールとの差異を認識するというのもしやすいので、多くの子どもたちの学びを確かなものとしていくことができると思います。

福島 技のポイントの説明が簡潔に書いてあってわかりやすいですね。さらに、説明が誰でもわかる言葉であるため、そこから子どもたちが自分の考えを発展させ、自分の言葉にアレンジしていくこともできるようになっています（図1）。

高木 言語の面で言いますと、子どもたちが実際にアドバイスをし合う場合、最初はどんな言葉を

やってみる できそうな上がり技に挑戦しよう

例1 ひざかけ上がり



〔図1〕簡潔でわかりやすい技の説明。



使っていいのかわからないと思います。そこで、副読本があると、「アドバイスをする際にはどんな言葉を使っているのか」ということがわかるでしょうし、副読本にある言葉を参考にして自分で考えたり、運動をする際のコツとして理解したりすることも促されると思います。

松田 今出てきたような簡単な言葉というのは、簡単で基本的だからこそ学習されるべきですね。子どもは生活の中で言葉を学んでいきますが、たとえば「倒立前転」という技について、子どもたちは最初、それぞれ自分なりの言葉でその動作を説明します。その段階から、「倒立前転」という言葉を使えば誰でも理解でき、それがどんな動作なのかということも伝わる、というところに至るには、やはり副読本に書いてある言葉が、そうした言葉を定着させていくうえで役に立つでしょう。

体育ではなく社会科の授業の例ですが、「川下」という言葉がわからない子どもは、「川下」という言葉を使って説明をされても説明自体が理解できません。「川下」が具体的にどんなところなのか、という説明があってはじめて理解できるようになります。このようにやさしい言葉や一般的な言葉でも、生活の中でなじみのない言葉というのはいろいろあると思います。そうした言葉を学習の中で拾っていかねばならないでしょうね。

■これからの体育、これからの副読本

松田 本日は副読本の効果や価値、必要性についていろいろな要素が話題にあがりましたが、それらがすべての先生と共有でき、そしてすべての子どもたちによりよい体育の授業が広がってほしいと思います。最後に、これからの体育学習と副読本について、先生方からお話を伺いたいと思います。

鈴木 世の中でICTの活用ということが言われており、体育で学習する技やゲームの様相の動画が全種類欲しい、などという声もあるようです。それはそれで便利だとは思いますが、私はむしろ紙ベースの静止画、イラストも充分よいのではないかと考えています。今後、副読本をどういったものにしていきたいかということにも関係しますが、『体育の学習』には、技のポイントや授業の流れの説明について精選された言葉が載っておりますし、イラストも細部にわたってこだわったも

のが掲載されていると思います。動画だと最初から最後までを子どもに見せて、そのまま理解させたり、動画のやり方そのまま先生が教えたりできます。しかし、副読本を使って、ポイントとなるイラストや写真を見ながら授業をすると、子どもたちはただ見るだけでなく考えながら授業に取り組むでしょうし、先生方も方向性を縛られることなく、副読本をきっかけにしてそこからいろいろな方向に授業を展開できると思います。また、これから改訂していくときには、“やってみる—ひろげる—ふかめる”という学習過程のもと、「子どもが自ら豊かな学びを創っていける」というメッセージをより明確に伝えられるものを作っていく必要があるでしょう。福島 イラストと同様に写真にもこだわりがあると思います。「他の技をやりたい」となったときに、動画として先生方が見せるのではなく、簡単に子どもたちが各自で確認できるという点でも本になっているよさがあると思います。

高木 以前、道德の先生が、道德の副読本を読書の時間にすぐ読めるようにしている、というのを聞いて『体育の学習』も日常の運動の助けとなるようになるのではないかと思います。実際に子どもたちに持たせていると、授業でやった動きを体育の授業の時間以外でもやってみたいという声が子どもたちから出てきました。そうした運動への意欲を子どもたちがもてたのがよかったと思っています。今後も子どもの意欲をより高めていきたいですし、そのための資料として副読本はとても使えると思いました。

松田 あらためて副読本の大切さやよさ、今後いかにうまく使っていくかなどのさまざまな示唆を得ることができました。

言語活動の重要性はいろいろな教科でも言われていますが、体育においても自分の行っている活動を相対化して考えたり、自分の言葉や記号に置き換えたりするという活動は求められています。そうした活動の助けとなっていくのが『体育の学習』のような副読本なのでしょう。本日は長い間、ありがとうございました。 ■

子どもたちの発想を刺激して活発な学習が展開！

■授業のイメージをつかむ！

子どもたちにわかりやすいイラスト

次の体育の授業でどのようなことをするのか、子どもたちがイメージしやすいように、朝の会で『体育の学習』を見せて（写真1）、「今日からの体育はこんな運動をするよ」と投げかけた。

子どもたちからは「楽しそう！ 早くやってみたい」「ボールランドをやりたいな」と授業前から意欲的な感想が聞かれた。『体育の学習』のイラストから、子どもたちはこれから行う授業のイメージをつかむことができた。

〔写真1〕



今日の体育はこんな運動をするんだね！ 楽しそう！ 早くやりたいな！

■動き方のコツが吹き出しでわかりやすい

～おおしますまいるらんのうごきをしよう～

体育館の壁面に単元タイトルを記すことで（写真2）、子どもたちのやる気が増した（写真3・4）。

また、『体育の学習』のイラストを写真に撮り、拡大コピーしたものを作成し、その時間ごとで行った動きを貼っていった（写真2）。

単元前半で、『体育の学習』が有効的に使われた場面があった。それは、動きはわかっているけれどうまくいかなかったときに『体育の学習』を開いて、動きを確認している子がいたことである。

例えば、「フラフープランド」では、うまくフラフープを転がせなかった子が『体育の学習』（資料1）を見て、吹き出しに書かれている言葉を読み、それを真似して行っていた（写真5）。

指導者が他の子への指導を行っているときなどに、自分で動きを習得するための手段として単元前半は『体育の学習』が有効的に使われていた。

〔資料1〕



〔写真2〕



〔写真3〕



私が勢いをつけて転がすね！

〔写真4〕



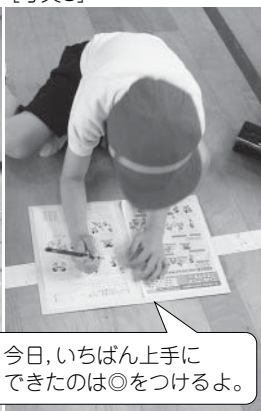
ゆっくり上がるよ！！

〔写真5〕



まっすぐ立ててやればいいんだね！

〔写真6〕



今日、いちばん上手にできたのは○をつけるよ。

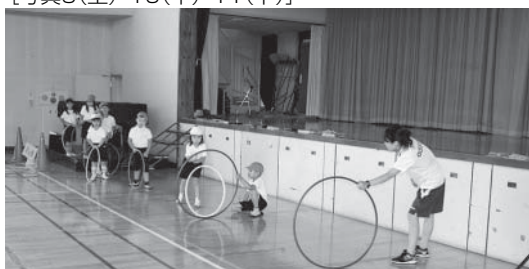
■1年生に記入しやすい学習カード

また、教師用指導書にある「学習カード」も今回活用したが（写真6）、1年生にも書きやすいように作られていたので、初めての学習カードも無理なく取り組み、評価の際に役立った。

[写真7(上)・8(下)]



[写真9(上)・10(中)・11(下)]



■子どもたちの発想を刺激する

～うごきをくふうしてできるかやってみよう～

単元後半はグループでいろいろな場をローテーションし、前半でできるようになった動きを工夫して行う活動だった。

しかし、1年生には「工夫」のイメージがつかずらいので、『体育の学習』を活用し(写真7)、グループで何をやるのか話し合いを行った(写真8)。

単元前半の紙面と後半の紙面が見開きになっているため、子どもたちから「あっ、この前にやった動きをこんなふうに変えてやるんだね。楽しそう」という声があがった。

工夫のしかたを『体育の学習』で知ると、今度は自分たちで考えた工夫が次々と出てきた。

子どもたちのなかには、工夫のしかたに迷ったり、決めた動きがわからなくなったりしているグループがあったので、そんなときは、指導者がもう一度『体育の学習』を見せて再確認できるようにしていった。

[子どもたちがひろげた動きの例]

- ・ 大きい輪に小さい輪を転がして通す(写真9)。
- ・ 首と首にボールを挟んで歩く(写真10)。
- ・ グループみんなで「セーの」で転がる(写真11)。
- ・ 缶ぽっくりのコースをつくる。
- ・ 姿勢を変えてボールをキャッチ
- ・ 友達と輪を転がし合う。 など

子どもたちは動きがひとつできるようになると工夫することが楽しくなり、アイデアがどんどん出てきた。アイデアを出すきっかけとして、『体育の学習』を見たことがよかったのだと思う。

■子どもたちの意欲を喚起する

『体育の学習』を使用することで、特に低学年の子どもたちは体育の授業のイメージや、具体的な動きのイメージをつかみやすくなったと感じた。イラストを見て、やってみたい!という子どもたちの意欲を喚起することにもつながった。

また、体育を専門としない他のクラスの先生方からも、この『体育の学習』は、「授業の流し方がわかりやすい」「学習内容を子どもたちに伝えやすい」といった声も聞かれ、学年間でも同じ授業を行うことができた。

子どもたちの主体的な学習を支える！

■子どもたちがゲームを楽しむ姿を求めて

本実践は、1年生の「的当てゲーム」である。『体育の学習』では、はじめに的当てゲームの様相が提示されている。次に、円が二重になり、ドーナツ状の部分で的を守る守備が登場し、攻防が分離するゲームに発展する様相が示されている。子どもたちには「円の中に置いた的にボールを当てて早く倒すことができたチームが勝ち」というルールを提示した。『体育の学習』では、ポートボールの台の上に段ボールの的を置く図が示されているが、子どもたちに「的の置き方」にもこだわらせたかったので、一斗缶を縦に2台つなげたものを3本使用することにした。的が缶であるため、ボールが当たったときや、地面に倒れるときに大きな音がして子どもたちもより夢中になる。ゲームに夢中になりながら、1年生の子どもたちがボールを投げる技能を身につけ、チームで工夫して「早く的を倒す」ことに向けて、より一層ゲームを楽しむようになる姿を求めて学習計画を立てた。

■すぐにゲームを始めることができる

第1時で、はじめのルールを子どもたちに示す際に『体育の学習』がたいへん効果的であった(写真1)。従来はコート図を黒板に示しながらルールを確認したり、試しのゲームをしたりしながらおさえていくことが多かったが、わかりやすい絵とルールが示されているので、1年生の子どもたちにもすぐにルールが理解できたようである。そのため、すぐにゲームを始めることができた。

本実践では、10人ずつの4チームで対戦することにした。円の中に缶を置いて(写真2)、早く倒すことに挑戦する子どもたち。なかなか勝てないチームが、あるときから常勝するようになった。すると別のチームの児童が、「ずるいよ」と叫んだ。「あのチームは円のすぐそばに缶を置いているからすぐに倒すことができるんだよ」、他チームからも「ずるい」の声があがった。私は子どもたちを集めて考えさせた(写真3)。「はじに置いたらすぐに倒れておもしろくないよ」「真ん中近くに置かなくちゃ」。確かに「ここに置かなければいけない」というルールはそれまでなかった。子どもたちが合意形成しながらルールを確認し、自分たちのゲームをよりおもしろくしていく姿だといえる。

〔写真1〕『体育の学習』ではじめのルールを確認



〔写真2〕 グループでの的の置き方を相談



〔写真3〕 子どもたちでルールを決めていく



〔写真4〕 倒しやすい置き方を考える



[写真5] 右のチームは同じ方向からの的をねらう作戦



[写真6] 夢中になってボールを投げる子どもたち



[写真7] もっとゲームをおもしろくするには……。



[写真8] 『体育の学習』で次時の内容を確認



「真ん中近く」に缶を置くことを決めた子どもたちは、次に「缶の並べ方を工夫して倒す」ことに挑戦していった(写真4)。3台をくっつけて平面を大きくしたり、隙間を空けて並べてドミノのように一気に倒す作戦を考えたり、円の一方に集まり同じ方向からねらう作戦を試したりと学習が盛り上がった(写真5)。的を倒すという課題に向かって夢中になしむ子どもたちは、入学してはじめてのボールを扱ったゲームを通して、仲間と工夫することや、協力して勝つことを目指すおもしろさを学んだ。なにより、ボールを思いっきり投げるとい「遊び」が大好きになっていった(写真6)。

■学習の発展に役立つ『体育の学習』

『体育の学習』では、的の置き方を工夫させることは明示されていない。これは、ルールを合意形成して確認することやチームで早く倒すコツを見つけることに学習のねらいを重点化した私が、アレンジした部分である。副読本を使いながら学習するときには、その通りにやるという利便さもあるが、学級の実態やどのような学びを構築していくのか、という視点から授業者が子どもとともに学習をつくっていく過程で副読本を効果的に利用することも大切であろう。授業の終盤、「このゲームをもっとおもしろくするにはどうしたらいいかな」という話題になった(写真7・8)。いくつかアイデアが出たあと、『体育の学習』の次のページに注目した児童がいた。「今度はこれをやってみよう」と攻防が分離して行う的当てゲームの様に目をつけたのである。次回は、5人ずつのチームに分けてやってみよう、ということになった。『体育の学習』を使うよさは、このように次の学習に発展させる際の大きなヒントを子どもたちに見つけ出させることができることにもあるのではない。特に、1年生の場合は子どもたちのアイデアは豊富に出るものの、「今までの学習をもっと難しくすることでおもしろくなる」という本質的な部分に向かっていくのはなかなか難しい。そのようななかで、副読本が子どもたちの主体的な学習を支えている姿を見た思いであった。子どもたちの日記には、「的当てゲームをまたやりたいです」「今度は敵と味方に分かれてやります。楽しみです」という感想が見られた。(すずき・さとし)

子どもたち自ら考えて学習を進める！

■学習の進め方がわかりやすい

『体育の学習』を使い、最初にこの単元の学習の進め方（資料1）を確認した。特に“やってみる”でできた技を“ひろげる”で演技に入れていくという確認を行った。

この“やってみる”“ひろげる”という学習の進め方が子どもたちにとって理解しやすかったため、教師の側で学習の進め方の準備や説明に時間を割かなくても、子どもたちは戸惑うことなくすんなりと学習を進めることができた。

『体育の学習』を使っでの学習の進めやすさについては、特筆すべきものがあつた。

■正確な連続写真から技のイメージをつかむ

学習の進め方を確認すること以外に、たくさんある技を知り、理解することにもたいへん有効だった（写真1）。以前に学習した経験がある技を思い出すことはもちろんのこと、技の数が多くなるので扱うことを控えていた技も、『体育の学習』の連続写真を見て技の動きをイメージして子どもたちが簡単に理解し、動くことができた。

特に、“ひろげる”の組み合わせのバリエーションが増え、子どもたちは楽しんで様々な動きを行うことができた。

■「こんな動きしてみよう」で動ける体をつくる

「こんな動きしてみよう」では、具体的な技ができるようになるための関係のある動きが掲載されている。非日常的な動きの鉄棒運動であるが、子どもたちは「こんな動きしてみよう」に紹介されている運動を経験することで、以後の活動にとって重要な動ける体づくり、感覚づくりがしっかりと行えた。また、動き方がわかりやすく表現されていて、子どもたちがスムーズに動ける流れで構成されているので、友達とペアを組んで楽しんで動くことができた（写真2）。

■子どもたちどうしの教え合いが活発化

なんと言っても『体育の学習』を使うことで、子どもたちどうしの教え合いが積極的にできるようになった。『体育の学習』を各自が手に持つことで技のポイントをチェックしながら、友達と教え合いができた（写真3～6）。また、従来だと、連

〔資料1〕『体育の学習』6年 63頁



〔写真1〕 オリエンテーションで活用



〔写真2〕 「こんな運動してみよう」をペアで行う



〔写真3〕 ペアでの見合い、教え合い



[写真4] 『体育の学習』で技のポイントを伝える①



[写真5] 『体育の学習』で技のポイントを伝える②



[写真6] 『体育の学習』で技のポイントを伝える③



[写真7] 学習カードを利用して組み合わせを考える



続写真を見て、ただ「練習しなさい」としか言えなかったが、技ができるようになるための「練習のしかた」が詳しく紹介されているため、自分たちで考えながら、鉄棒運動を進んで活動することができていた。

さらに、この詳細な「練習のしかた」は、運動が「できる子／できない子」という二極化が進行しているなか、本書を使うことで技能レベルの二極化を避けるためにも大事だと感じた。

■自分で考えて活動できる

『体育の学習』には技が豊富に掲載されている。教師の側で児童が取り組む技を絞り込まないで、子どもたち自身が多くの技の中から自分が挑戦する技を選んで活動することができた。また、技がたくさん掲載されているので技の組み合わせのバリエーションが増えた。

付属の学習カードを利用して技を組み合わせることで、簡単に組み合わせ技を考えることができ(写真7)、自信をもって演技することができていた。

■子どもたちの感想から

- ・技のポイントがいっぱい書いてあってわかりやすかった。
- ・「足を大きく振る」や「手の返し」など、大切なところを書いてあった。
- ・連続写真で技が紹介されていてわかりやすかった。
- ・どこで膝を曲げたり伸ばしたりするか、具体的にどうすればいいかがよくわかった。

全体的に、子どもたちからは技のポイントがわかりやすい点と写真で見やすい点がよいとあげられていた。

■おわりに

実際に『体育の学習』を使用して授業を行ってみて、子どもたちが動き方を見てすぐに動けるようになること。動きのポイントを見て、教え合いができること。授業の準備を簡単に行うことができること。そしてなにより、これを使って授業がすぐにできることを実感した。最後に、動ける体づくりをして、鉄棒運動の楽しさを十分に味わわせてあげてほしいと思います。(ふくしま・まさみ)

子どもも教師も意欲が高まる副読本！

■学習の流れがわかりやすい！

本実践は、3年生の「リングゲーム」である。初めに『体育の学習』を活用しながら、単元の進め方や学習の流れ、ゲームの進め方を確認した。

親しみやすいイラストとわかりやすい解説のおかげで、「早くゲームがしたい！」と、子どもたちの意欲を高めることができた。

また、教師の視点から見ても、学習の進め方だけでなく、コートの大ささのめやすも載っているのので、授業づくりの際、場の設定やルールなどを決めるのに大いに役立った。

■だれもが活躍できる「やさしいゲーム」が紹介されている！

3年生の子どもたちにとって、リングゲームのようなゴール型ゲームで、初めからオールコートゲームを行うことはなかなか難しい。能力の高い児童や経験のある児童ばかりが活躍したり、動き方がわからない児童が見られたりするからだ。

『体育の学習』には、オールコートゲームを行う前に、少人数で行うハーフコートのゲームが紹介されているので、児童の実態に合わせ、まずハーフコートゲームに取り組んだ。

3オン3のような、攻めと守りの区別がはっきりしているハーフコートゲームを最初に行うことで、攻め方・守り方をじっくり学びながら練習をすることができた。また、対戦するどちらのチームも2回ずつ攻めることができるので、何度も繰り返して動き方を確かめたり、チームとしての攻め方を思考したりすることもできた。

このように、最初の段階で少人数のハーフコートゲームを行うことで状況判断が容易になり、だれもが意欲的にゲームに取り組むことができた。

■作戦タイムでも活用できる！

毎時間、ハーフコートゲームの後に、作戦タイムをはさんでオールコートゲームを行った。対戦相手は変えず、ハーフコートゲームでの手ごたえをもとにオールコートゲームにつなげる作戦を各チームで考えた。

本実践では、リングゴール裏にフリーシュートゾーンを設けたので、作戦タイムでは、このフリーシュートゾーンを活用してシュートをきめようと



オリエンテーションで活用



『体育の学習』掲載のハーフコートゲーム



掲載されているやり方に沿って取り組む子どもたち



ハーフコートゲームではだれもが活躍



作戦タイムで活用①



作戦タイムで活用②



動きのイメージを意識してパス練習



山なりになるようにシュートの練習

話し合うチームが大半だった。しかし、ゲーム回数を重ねるにつれ、守りのチームの力も高まってきた、このような簡単な作戦がうまく実行できなくなってくるが増えてきた。

そこで、作戦タイムで、『体育の学習』にある「こんなときは……」を活用して、停滞していた攻め方を工夫できるように話し合いをさせた。すると、各チームとも『体育の学習』に掲載されている動き方を参考に、作戦ボードでマグネットを動かす姿が見られた。攻め方の例を見たある児童の「そうか、もっとパスを細かくつなげばいいんだ」のひと声、チームの新たな作戦の糸口となった。

その後のオールコートゲームでは、新たな動き方や攻め方がたくさん見られるようになり、ゲームも大いに白熱した。

■ゲームで活用する技能がわかりやすい！

「リングゲーム」では、パスやドリブルなどの技能を使って、相手をかわしながらボールを相手チームのゴール付近まで運び、シュートをきめなければならない。しかし、単元の初めでは、仲間からのパスが強すぎたり山なりになりすぎたりで、ボールをぼろぼろ落とすことが多く、パスがつかないことが多かった。

『体育の学習』では、相手がとりやすいボールを送るために必要ないろいろなパスのしかただけでなく、シュートのしかたやドリブルのしかたも載っている。さらに、動きのポイントも簡潔に示してあるので、子どもたちに具体的な動きのイメージをもたせて運動に取り組ませることができた。

■子どもだけでなく、教師にも親切！

『体育の学習』には、学習のねらい、学習の進め方、運動のしかたが、わかりやすく載っている。子どもたちにとっては、具体的な動きのイメージがつかみやすく、「やってみたい！」と意欲が高まる紙面構成である。教師にとっても、授業づくりに役立つことがシンプルでわかりやすく載っていて、子どもと同じように「やってみたい！」という気持ちになる。『体育の学習』は、体育だけでなく、他教科も指導しなければならない小学校の教師にとって、とても親切な副読本である。

(おかむら・あつし)

運動が「わかる」から「できる」子どもへ

■意欲的・主体的に活動する姿をめざして

本単元は「多様な動きをつくる運動遊び」の中の「体のバランス」「用具の操作」の2点に絞った単元構成とした。この単元の流れを考えるうえでベースとしたのが『体育の学習』にある“やってみる”“ひろげる”2つのフレームの学習過程である。『体育の学習』では、いろいろな用具が提示されているが、より主体的に工夫して用具を操作させたかったため、あえてボールとフラフープに限定して学習することにした。全6時間扱いとして、前半は教師や友達の動きを見て多様な動きを知り楽しく意欲的に取り組む時間、後半は「とみざわランド」として、グループやペアでいろいろな場に行き、主体的にできる動きや工夫した動きに挑戦する時間とした（写真1）。

■動きのイメージをわかりやすく伝え、意欲向上

単元前半では、『体育の学習』のイラストを見て、フラフープやボールを使ったり、バランスをとったりする運動遊びを「みんなでいろいろな動きをしながら楽しい運動遊びをしていくよ」と話した。「早く挑戦したいな」「フラフープが楽しそう」「ボールで遊びたいな」など、意欲的な発言が聞かれた。『体育の学習』のわかりやすいイラストから、実際にやってみて、これならできそうといった意欲が生まれ、子どもたちなりの動きのイメージをつかませることができた（写真2）。

■いろいろな動きに積極的に挑戦できる

毎時間、ブリッジやV字バランスなどの体をほぐす要素を取り入れた「1年げんきたいそう」の準備運動から始めた（写真3・4）。

単元前半では、指導者が模範を見せて授業を進めていくのが基本ではあるが、1人もしくは友達どうして一斉に動きに取り組むときは、指導者が全員に対して助言するのが難しくなることがある。そのようなとき、子どもたちに『体育の学習』のイラストや吹き出しを参考にさせたところ、自らの動きを確認したり、ポイントを知るための手段として活用したりして、積極的に動きに挑戦する姿が見られた。子どもにとって、運動ができるようになるためのアドバイスのひとつとして『体育の学習』を活用することができた。



【写真1】とみざわランドでの約束・遊び方を説明



【写真2】子どもたちなりにイメージをつかむ



【写真3】準備運動のブリッジ



【写真4】同、V字バランス



【写真5】『体育の学習』を参考に工夫した動きに挑戦



[写真6] 壇上の友達とキャッチボール



[写真7] バランス崩し



[写真8] どこまで行くか？



[写真9] 3本回しに挑戦！



[写真10] 背中でボール運び



[写真11] 3人で挑戦！



[写真12] ポールや姿勢を変えてもできるかな？

■主体的に考え、工夫して活動するきっかけに

単元前半では基本となる動きや遊び方を知り、単元後半では、前半で経験した基本となる動きや遊び方をもとに、いろいろな種類のボール等を準備したり場の設定を変えたりして、1年生なりに工夫した動きを見つけて運動してみようということを決めた。大きな柱とした。「とみざわランドで遊ぼう」と題した学習カードを用意し、多くの場をローテーションしながら活動させた。その際、工夫した動きを確認したり、気づかせたりする手段として『体育の学習』を活用した。子どもたちは、学習カードと『体育の学習』を見ながら「これを変えてやってみよう」「こうしたらおもしろいんじゃないかな」などと話し合いをして、いろいろな動きに挑戦していた（写真5）。また『体育の学習』の“ひろげる”をより発展させ「人数や姿勢、物、距離を変えたり、競争したりすること」を大切に、工夫した動きができるよう声かけをした。さらに、その工夫した動きを全員で共有する時間を設けて、より多くの子どもに新たな動きの発見や工夫が生まれるように努めた。その結果、子どもたちは意欲的かつ主体的に活動し、たくさんの動きを考え出しながら運動することができた。以下は、子どもたちの工夫で生まれた動きである。

- ・ 違う高さでキャッチボール（写真6）
- ・ だんだん離れてバランス崩し（写真7）
- ・ 遠くからフラフープ転がし（写真8）
- ・ フラフープの3本回し（写真9）
- ・ 2人で背中にはさんでボール運び（写真10）
- ・ バランスボール3人背中運び（写真11）
- ・ いろいろなボールで、姿勢や高さを変えてキャッチ（写真12）、など。

■「わかる」から「できる」子どもへ

『体育の学習』は、動きのポイントがわかりやすく表されているので、子どもたち自身がイラストや吹き出しを読み、それらの情報を活用して運動に取り組める内容となっている。この単元では、『体育の学習』を活用することによって、運動ができる喜びにつなげるための手立てとすることができた。今後も、運動が「わかる」から「できる」につなげるための1つのツールとして、活用していけたらと思う。

（さいとう・まさとも）

子どもの技能・教師の指導力を高める

■学習の見通しに役立つ

本実践は、5年生の「バスケットボール」である。単元第1時のオリエンテーションにおいて、『体育の学習』を活用しながら、単元の進め方や学習の流れ、ゲームの進め方を確認した。

確認する際、『体育の学習』には、イラストを用いたわかりやすい解説が掲載されているため、子どもたちがこれからの学習活動についてイメージをもちやすかった。また、おさえるべき運動の特性や指導のポイント、場の設定の目安などについても紹介されているため、教師にとっても単元を組み立てる際に大いに参考になった。

■段階をふんだ指導に役立つ

単元を組み立てる際に、練習で習得した技能を活用してゲームを行い、さらにゲームを通してよりいっそうの技能の習得を図りたいという思いから、ステージ型の構成を考えた。そこで参考になったのが、『体育の学習』である。

『体育の学習』には、簡易化されたゲームが紹介されており、運動が苦手な児童でも取り組みやすく、また、ゲームを通して技能を身につけられるように工夫されている。本実践では、4年生でも経験した「ハーフバスケットボール」を単元の前半で行うことにした。

バスケットボールは、攻めと守りが瞬時に切り替わるため、苦手な児童は状況に応じた動きがわからず、意欲の低下につながりやすい。そこで、3対3の攻めと守りをはっきり区別したハーフコートでのゲームを行うことにより、ゲームにおける動きが明確になり、4年生での実践で身につけた技能を振り返ることができた。単元の後半では「オールコートバスケット」を行ったが、単元の前半で身につけた技能を生かしてゲームを行うことができたため、スムーズに移行することができた。

■チーム・個人練習に役立つ

単元の後半でチーム練習を取り入れたが、いざ練習内容を考える際に内容を決められないチームがいくつか見られた。そこで、『体育の学習』に掲載されているチームでの練習内容を参考にするようにアドバイスすると、自分のチームの実態に



学習の見通しをもつことができる



個人技能から集団技能への練習のしかたの手助けに



練習やゲームでの個々の動きが明確になる

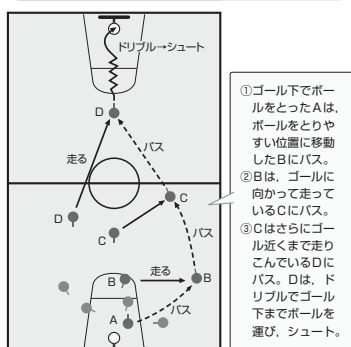


個人やチームのめあて、練習方法がわからないときに



兄弟チームの動きをアドバイスするヒントに

相手の守りが整っていないとき ▶たてパス作戦



この図式で、人の動きやボールの動きを共通理解



ホワイトボードでの作戦もみんなでイメージしやすい



みんなで取り組んだことは、さらなる意欲につながる！

合った練習を選択し、友達と教え合いながら取り組む姿が見られるようになった。また、『体育の学習』には、バスケットボールに必要なパスやシュートの技能がイラスト入りで紹介されている。そのイラストで示された動きをもとに、実際に自分でやってみたり、友達と動きを見合ったりして、主体的に練習に取り組む姿が見られた。さらには、単元が進むにつれて、兄弟チーム（互いの動きを見合うチーム）どうして進んで話し合い、ゲームにおける状況を設定しての合同練習を行うこともできるようになっていった。

■作戦を立てる際に役立つ

「オールコートバスケット」で、前半終了後のハーフタイムに作戦タイムを設定した。兄弟チームによるアドバイスをもとにして、後半につなげられるように、各チームにホワイトボードとマグネットを配付し、作戦を考えさせた。ここでも『体育の学習』が役に立った。

『体育の学習』には、作戦の内容が図式でわかりやすく説明されているため、ホワイトボード上で実際にマグネットを動かしながら考える際に、動きがイメージしやすくなる。ある兄弟チームが「相手がいないところに走り込んでボールをもらうように攻めるといいよ」とアドバイスして後半のゲームに臨み、その作戦がうまくいくと、「やった！」という歓声があがった。次の試合では、『体育の学習』に示された作戦をもとに、子どもたちがさらに作戦を工夫することで学習が深まっていった。

■評価に役立つ

『体育の学習』教師用指導書の巻末には、ワークシート集が掲載されている。「やってみる－ひろげる－ふかめる」でカードが構成されており、習得と活用の流れをおさえた授業づくりや、その評価を行ううえで大いに参考になった。

以上のことから、副読本を活用することによって、児童の技能を高めることができ、さらには教師にとっても、新学習指導要領の内容に沿った授業づくりを進めるうえでのよい指針となった。これからも子どもたちが楽しみながら技能を高めていけるような授業を、『体育の学習』を参考にしながら考えていきたい。（なかにし・せいじ）

スムーズな学習が展開できる！

■子どもたちの意欲を高める運動例！

本実践は、6年生の「体ほぐしの運動」の単位に関するものである。本単位ではまず『体育の学習』を活用しながら単元の進め方や学習の流れ、運動内容を確認した。その際には、運動の行い方をイメージしやすい写真とわかりやすい解説のおかげで、「早くやりたい！」「おもしろそう！」と、子どもたちの意欲を高めながら運動の行い方を理解させることができた。

■教師の立場からも使いやすい副読本！

『体育の学習』は教師の視点から見ても、単元の学習のねらいを確認したり、運動の行い方をイメージしたりするのに活用できる。それによって、授業の前に具体的な言葉かけや指導方法を考えるうえで大いに役立てることができる。

さらに、『体育の学習』の内容をもとにして掲示物を作成し、運動内容の説明に用いることもできる。その結果、運動の行い方について効率よく指導することができ、スムーズに実践につなげることができた。

■わかりやすい学習過程！

また、『体育の学習』に掲載されている単元の構成は、単元のねらいや学習の流れが明確でわかりやすい内容になっている。

そのため子どもたちは、「やってみる」「ひろげる」「ふかめる」の3つの過程で学習を進めていくことで、「体ほぐしの運動」における目的である「体の気づき」「仲間との交流」「体の調整」の3つのねらいへの理解を深めることができた。

■だれもが楽しく行える

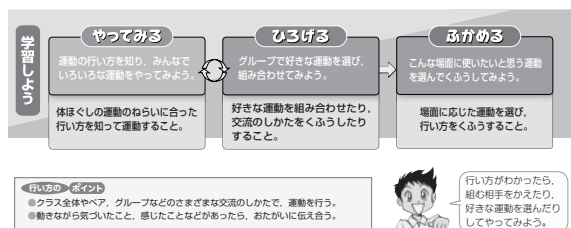
体ほぐしの運動例を紹介！

『体育の学習』には、肩をマッサージしたり、背中をトントンたたいたり、体の上を転がったりするなど、仲間と体を触れ合わせる運動例が数多く紹介されている。

それらを参照することで、子どもたちは、ペアを組んでのリラクセーション、『大根ぬき』、『風船を使って』など、自然に手をつないだり体を触れ合わせたりするさまざまな運動があることを知り、楽しく実践することができた。



授業のスタートで活用する



『体育の学習』掲載の単元の学習の流れ



『体育の学習』に掲載されている運動例を掲示物として活用し、運動の前に確認させる



リラクセーションで心もスッキリ



『大根めき』に挑戦する…「やってみる」



交流のしかたを工夫する…「ひろげる」



グループで運動を選んで行う…「ふかめる」



学習の振り返りでも『体育の学習』を活用できる

■授業の中でも簡単に確認できる！

『体育の学習』は、ここまでで取り上げたように授業の導入場面だけでなく、新しい運動内容を紹介する際にも活用することができる。

例えば、新しい運動を行わせようとするたびに、紙面を見せて運動内容などを説明すると短い時間で理解させることができる。そして、説明の時間を短くできるので、45分の中で十分な運動量を確保することができた。

また、掲載されている運動例の写真を掲示することによって、より効率よく活動することができた。そのため、運動の実践に時間をかけ、子どもの運動量を効果的に確保するうえで、とても親切的な副読本である。

■単元の学習の流れ「やってみる」「ひろげる」

最初はグループごとに『大根めき』に挑戦した。運動内容のイメージを明確にもつことができていたので、楽しく行うことができた。

そして一度やってみた後に、グループごとに作戦タイムの時間をとった。隣どうしで仲間を入れ替えて交流したり、腕の組み方を工夫したりするなど、運動の行い方を広げることができた。

■単元の学習の流れ「ふかめる」

さらに、授業の後半では、グループごとにもう一度やってみたい運動を選び、運動の行い方を工夫する姿が見られた。また、運動の工夫を考える際には、『体育の学習』に掲載されている吹き出しの言葉についても参考にしていていた。

そして実際に運動する中で、「体のどこでついてもいいよ」「風船の下にみんなで動くよ」「人とぶつからないようにね」など、吹き出しの内容を生かして互いに声をかけ合いながら取り組んでいた。

■授業の振り返りでも活用できる！

授業の振り返りでは、「体の気づき」について、学習カードに記録した。さらに、『体育の学習』を活用し、紙面を用いて本時の運動内容を振り返ったり、次時以降の運動内容を確認したりすることもできた。

(たかぎ・こうすけ)